あとがき

山下　洋
やました　よう

京都大学フィールド科学教育研究センター教授

第六回時計台対話集会では、メインテーマを「木文化―森里海連環学がひらく未来社会―」としました。今回「木文化」をとり上げたのは、京都大学フィールド科学教育研究センターが提唱する「森里海連環学」の新たな挑戦として、今年度から文部科学省の予算により「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業」、通称「木文化プロジェクト」を開始したからです。「木文化プロジェクト」は、人工林を中心に適正な森林の植生管理を行うことが、森の環境と生態系だけでなく、そこから流れ出る河川や沿岸海域の再生にもつながることを証明しようという、壮大な事業です。高知県と京都府にも協力頂き、異なった植生管理下の森林や全く管理しない放置荒廃林などの間で、環境、生態系、生物生産力、生物多様性を比較研究しています。期間は五年間ですが、五年で明快な答えが出るはずもなく、この期間に調査・研究体制を構築し、

第6回時計台対話集会　講演録　平成22年3月23日　第1刷発行

編集・発行●京都大学フィールド科学教育研究センター
〒606-8502　京都市左京区北白川追分町　TEL 075-753-6416

編集協力●サイファーアソシエーツ株式会社

さらに二〇年は追跡調査を継続する必要があると考えています。

また、このプロジェクトの特徴は、前記の自然科学系の研究は全体の半分に過ぎず、残りの半分は適正な森林管理を可能にする社会・経済システムに関する研究で構成されることです。まさに、木文化の創生は、このプロジェクトの基盤づくりと位置づけることができます。正しい森林管理のためには、森を守る文化とともに、森を利用する文化、木材を使う文化の再生と振興が不可欠であろうと考えています。木の文化は、暖かく心に優しい文化と言うことができます。フィールド研の田中克名誉教授は、ずいぶん以前から、子供達は木で建てた学校で学ぶべきと主張されてきました。木のぬくもりの中で、子供達自らが清掃し、あるいは大人達が修理しながら守り続ける学校での生活には、学力にとどまらない様々な付加的教育効果が存在すると確信します。また、人工林で生産された木材の利用は、二酸化炭素排出の抑制にもつながります。

私は三〇年以上海の研究を続けてきました。子供達が木でできた学校で学ぶことが、海の環境再生につながるなどということは、一〇年前には思いも及ばなかったことです。木文化の再生と海の再生が本当に科学的に結びつくのか、この研究は〝挑戦〟以外の何ものでもありません。さいわい、今回の時計台対話集会では、森里海連環学研究の具体的な成果の一端をご紹介できました。この「木文化プロジェクト」を核に、フィールド研の挑戦が実を結ぶことができるよう、次回以降の時計台対話集会においても、さまざまな人達と多様な視点から意見交換できることを楽しみにしています。